
巡る軌跡

せおりめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巡る軌跡

【Nコード】

N4575BA

【作者名】

せおりめ

【あらすじ】

大芽と瑞穂は幼馴染みの婚約者同士。幼い頃に決められた約束が、成長したお互いにとって都合がいいとは限らない。遅すぎた一言が、二人の間に歪なミゾを作っていく。

執着を捨てきれない女と、赦すことができない男の話。

神様、あなたは残酷で、そして――

「今時、親が決めた結婚なんてないよね」

同意を求めるように笑いながら話しかけてくる大芽に、私も同じく笑いながら頷き返していた。

古谷大芽と私、ふるやたいが立川瑞穂は世間一般で言う、許嫁同士という間柄だ。たちかわみずほ

古谷家は、大芽のお祖父さんが興した多くの子会社を傘下に持つ大企業のトップ。要するに、大金持ちというやつ。兄妹のいない大芽はその跡取りに相応しい、良くできる頭、どこに顔を出しても花形になれる目鼻立ち、万が一の為に護身術で鍛えられた身体、強く健やかな精神、穏やかな性格という風に、心身共に恵まれている。一方の立川家といえば、両親が共働きの、普通の中流家庭。私は大芽よりも二つ年上で、容姿はブサイクとは言われない程度。背は可愛くないことに、女にしては高めの170センチ台、成績は中の上辺り。

当たり障りのないプロフィール、と形容すればまだ聞こえがいいのかもしれない。

学区も違い、年齢も違い、血の繋がりもない私たちにはなんの接点もないはずだった。

そもそもの始まりは、まだ私が生まれて間もない頃にさかのぼる。その日、大芽のお祖父さんは朝から体調が悪かった。でも会社の

命運を決める大事な会合があるとかで、どうしても休んではいられなかった。まだ今ほど大きくなかった会社はこれから伸びるか、それとも衰退の一途を辿っていくかの瀬戸際で、今一つ頼りなかった長男、いずれ大芽のお父さんになる年若い息子には任せておけなかったらしい。

会合場所のホテルに向かう途中、お祖父さんは別件で指示を出すために、公園で車を降りた。いつも使っている電話付きの車ではなく、たまたまハイヤーに乗っていたので公衆電話が必要だったのだ。もちろん、携帯なんてまだ世に出ていない。

電話を終え、ボックスを出たお祖父さんはそこで痛恨のミスをしたことに気づかなかった。大事な書類の入った鞆を電話ボックスに置き去りにしてしまったのだ。いつもならそんな失敗は絶対にしない。でも具合の悪さはお祖父さんから注意力を奪っていた。

ホテルに着いて、会合前の控え用に取っていた広く豪華な部屋でそのことを思い出したお祖父さんの絶望は、どれほどのものだったんだろう？ 自分の肩に背負っている妻や子供、社員、その家族、様々な人たちの顔が頭をよぎっていったんじゃないだろうか？

すぐにでも取りにいきたい。でももうそんな時間はない。部屋に備えつけられた、飾りと一体になった時計はそんなお祖父さんの心理なんてお構いなしに時を刻んでいく。

お祖父さんは部下に場所を告げ、急いで公衆電話へ向かわせた。すぐに出られるよう部屋の電話を側に置き、ベッドに腰掛け、いやに進みの早い時計の音を、逸る気持ちを抑えながら聞く。焦燥だけがつのり、立つこともできず、しばらく同じ姿勢のままで頭を抱えていた。

どれほどの間そうしていただろう？ 赤いランプが灯り、電話が鳴り出した。その音に瞬間ビクリと肩を震わせるものの、お祖父さんは飛びつくように受話器を取る。交換の女性に早く部下に繋げと怒鳴りたいのを必死に堪え、次いで耳に入ってきた待望の報告に、お祖父さんは打ちのめされた。

「電話ボックスに書類はありませんでした」

誰かが持っていてしまったのだ。

お祖父さんが置いていった書類はヒモで閉じるタイプのファイルケースに入っており、その中には心得のある人ならいくらかでも利用できそうな、機密事項も沢山詰め込まれている。それでも時間は一瞬も待ってくれない。時計を見ると、そろそろ会議の部屋へ向かわなければいけない刻限だ。

もう見つかる可能性はほとんど無いだろう。それでも念のため、と部下に辺りを探すように言い含め、お祖父さんは苦悩を絞り出したような溜め息と一緒に受話器を降ろした。

言い表しようのない虚脱感がお祖父さんを襲う。

力なく胸に手をやった。大事な代表印と角印は胸ポケットに入れている。しかしそれがなんだというのだろう。もう今日限りで会社は消えてしまうのだ。

一から作り上げた会社はお祖父さんの自信そのものだった。大きくなると共に夢も膨らみ、周囲の尊敬、羨望、地位や名声、人脈等、あらゆるものが付随してきた。

その全てを喪う。

見渡すこの部屋も控えのためだけに取ったのに、明らかに内装も広さも、備え付けの備品も一般より上等だ。こんな部屋に泊まることもできなくなる。

お祖父さんの中で積み上げてきた世界が崩壊する。恐ろしさに震えが起こり、吐き気が込み上げてきた。

覚束ない手で自分の身体を抱き締める。家族も愛想を尽かして去っていつてしまうだろうと考えた。

首を括るしかない。

部下の報告からお祖父さんが死を決意するまで二分足らず。随分短い時間だという気もするけれど、お祖父さんにとっては今まで生

きてきた人生よりも余程長く感じられた。会合が終わった後に、潔く始末をつけよう。ぐずぐずと未練がましくのたうち回りたくはない。

おかしなもので、そう決めた途端、お祖父さんの心は噓のように落ち着いた。震えも止まり、吐き気も治まった。

お祖父さんは腰かけていたベッドから立ち上がった。誰がみているというわけでもないのに、見苦しくないように、と胸を張り、背筋を伸ばして確かな足取りでドアの方へと歩いていった。会合に出席しなければ。

ノブに手をかけた所で、また電話が鳴り出した。お祖父さんは振り向く。ベッドの上の、白く四角い電話を見つめ、少しだけ逡巡する。どうせ時間だから集まれという、知らせの電話だろう。このまま無視して目的の部屋まで行つて、聞かなかったことにしても問題は無い。電話に出るといふ行為自体が億劫だった。

でもお祖父さんはノブから手を離し、結局は電話を取った。ドアを開けたら電話の音が漏れる。気紛れだったかもしれないし、電話の音を誰かに聞かれ、どうして取らないのかと思われるのが煩わしかったのかもしれない。さらに声でもかけられたら余計にうつろしい。

受話器を取ると、嫌みなほど冷静な女の声が、外線ですと伝えてきた。内線ではなかったのかと、お祖父さんは若干意外な気持ちで相手に繋がれるのを待つ。

電話から流れてきた声が告げる内容を確認して、お祖父さんは涙を一筋流し、信仰する神様に心から感謝したという。会社経営とは運頼みなどところもあるそうで、お祖父さんは結構信心深い。何はともあれ、この電話へ出る気にさせてくれた神様に頭を垂れた。

電話は会社からだった。

会社に、交番から連絡があったそうだ。お祖父さんが忘れてきた書類ケースが落とし物として上がっている、と。丁度そちらの社員だと名乗る人が引き取りに来たが、渡してもいいものかと、警官が

確認を取ってきたのだ。

そこまで聞いてお祖父さんは、その社員は忘れ物を探しにいかせた部下のことだと確信した。彼は近くの交番へも足を伸ばしたのだろう。特別報奨金を出してやらねばと頭の中で考えながら、電話に意識を戻す。社員証の名前と番号で身元を保証し、お祖父さんには会社の方から連絡しておく約束して、交番との電話は切ったそうだった。

書類を持って既に部下がこちらへ向かっていると聞いてから、お祖父さんは安堵の溜め息と共に受話器を置いた。

先程までの絶望感が嘘だったかのように希望が湧いてくる。お祖父さんの世界が再生されていく。

そして唐突に、お祖父さんは自分を恥じた。お祖父さんは自らの命を絶とうとしていた。自分自身では惨めたらしくないように散っていく、というイメージだった。お祖父さんの世代はちよっぴり武士道精神が入っている。

でもそれは全ての厄介事を他の者に任せ、押しつけただけの自分勝手な行為だと、後のお祖父さんは語る。経営者なら、最後の一人まで社員の行く末を考えてやらなければならない。家族についてもそうだ。離れていくだろうと決めつけてしまい、全く信じていなかった。

ほんの数分で天国と地獄を行き来したお祖父さんに、もう怖い物はない。書類も無事手元に届き、その後出席した会議も難なく切り抜け、会社は成長し続けている。

後はよくあるお話の流れ。お祖父さんは書類を交番へ届けてくれた正直者に恩義を感じた。名乗らず颯爽と去っていったらしいその人を、手を尽くして探し出した。

三ヶ月後に出会った恩人。それが私の父だったというわけだ。窮地を救ってくれたことと、拾得者が落とし主から貰えるお礼を期待しない奥ゆかしさ。お祖父さんの中で、私の父への評価はうな

ぎ登りに上がっていったらしかった。会えない時間が気持ちを育てるとは、恋愛だけに当てはまる現象ではないようだ。

その時まだ二十代半ばだった父は素朴で正直で善良で、休みの日には寝っ転がってテレビを見たり、ちよつとスロットでも打ちに行きたいな、という所謂どこにでもいる、それから何年を経ても変わることはない一般市民だった。中堅会社の技術畑で働いている、ヒラ社員。

お祖父さんは父にぜひ恩返しをしたいと思い、会社に役員待遇で来てくれないかと父を誘った。身の丈にあつた平凡を愛する父は、棚ぼた的に得る会社を動かせる地位などんでもない、と当然断る。父としてはただ単に自分の性質を考えての選択だったのだけれど、これがまたお祖父さんの胸を打ってしまったらしい。

会社の代表取締役として、海千山千の猛者たちと渡り合ってきたお祖父さんの目には、父の人柄は新鮮に映ったようだった。お陰様フィルターを装着すると、凡人も清廉の徒と映る。

でもお祖父さんがどれだけ気に入ろうと、自分の哲学に殉じる父は頑として譲こうとしない。何を提案しても、ただ落とし物を拾っただけなのだから、何もしてもらういわれはないと突っぱねる。けれどもお祖父さんとしてはなんとかして恩義に報いたい。

そこでお祖父さんは、まだハイハイをしていた私に目を付けた。これならば、と閃いた。

息子に男の子が生まれたらお嬢さんを嫁にukれないか、と頼んだのだ。気の長い話だけれど、家族になれば何をするにも理由がつけやすい。結婚をするまでの間も子供たちを通して縁を繋いでおけるとお祖父さんは考えたわけだ。

もちろん父は、何を突飛なことを、と断る。娘には、自分で相手を選ばせてやりたいと言った。まだ生まれてもないその子にとっても可哀想だろうと。

でも今度はお祖父さんも頑張った。もちろん、最終的には本人たちの好きにすればいい。これは口約束だけで、いつでも解消できる

縁組みだ。

結局、言葉を尽くして説得しようとするお祖父さんの熱意に負けて、父は首を縦に振った。

どちらの子供にも決して強制はしないという約束で、私と大芽の婚約は成ったのだった。

帰り際、玄関でお祖父さんはまだ生後八ヶ月だった私を抱き上げてくれたそうなのだけど、よく覚えていない。まあ当たり前だ。

人見知りの時期だった私は盛大に泣いたそうだ。

零れる涙を弾く産毛が、開け放たれた玄関からの光に白く透けていたと。鼻よりも高い、滑らかな桃のような頬が愛らしかったと、在りし日のお祖父さんは懐かしそうに眼を細めて語っていた。

小さい頃、私は大芽を従兄弟か何かだと思っていた。月に何度か決まった日になると、黒塗りのピカピカした車が家の前に停まる。それが大芽がやってきた合図だった。

引き戸の玄関をガーッと勢いよく開け、幼い子供の声が家中に響く。

「ミズちゃん、シンくん！ 来たよ。何して遊ぶー？」

大芽との思い出で、一番古い記憶はこのシーンだった。夏の暑い日、開け放たれた玄関から音波攻撃のような蝉の声が、強烈な日射しと共に入ってくる。五歳の私と、三歳の大芽と同一年である私の弟、心は、もつれ合いながら廊下へまろびでる。大芽は、くつきりと明暗の分かれた光と影の中に立っていた。

「タイちゃんっ！ 今日はウチで遊ぶ番だね。ツナギさまに行こ！」

「行こ！ 行こっ！」

「うん、しゅっぱーっ！」

大芽が来た時は、ウチで遊ぶか彼の家へ行く。それが毎回交互に繰り返されていた。

「行つてきまーす！」

三人で声を揃え、後ろから追いかけてくる「帽子被つてくのよー」という母の声に押されるようにして、お揃いの麦わら帽子を被った私たちはいつも飛びだしていった。

ウチの近所には湾があり、十分で一周できるくらいの小さな島が二つ連なって浮かんでいる。手前の島には堤防から続く朱塗りの橋が渡っていて、小さな神社が佇んでいる。潮が引くとそれぞれの島を繋ぐように道が現れ、行き来することが出来る。それが所以でその神社はツナギさまと呼ばれていた。大芽が来た時は、大抵ここで遊んでいた。

大芽はおっとりとしていて私たちの中でも一番チビで、活発な弟と比べてトロかった。転んで全身濡れ鼠になった大芽をおんぶしてビシャビシャになった彼の靴を弟に持たせて家に帰ったことも幾度となくあった。

大芽の家へは、彼が乗ってきた大きな車で向かう。中にはカーナビの画面よりもっと大きなテレビや冷蔵庫、それから向かい合った広い座席があり、私と弟はこの車に乗るのが好きだった。これがロールスロイスのリムジンであると知ったのは、もっと大きくなってからの話だ。

運転手さんは狭い住宅街を巧みに走り抜け、国道を通る。その間、私たち三人は家に着いたらかくれんぼしようとかはしゃぎ回る。大きな門に入ってもまだ大きく迂回し、やっと辿り着く先が大芽の家だった。

大芽のお母さんは、彼が生まれた時に亡くなっている。難産が原因だったそう。会社の社長であるお父さんは常に忙しく、大芽はかなり寂しい思いをしていたらと思うけれど、彼はそれを私と弟に見せようとはしなかった。ただ時々、私たちを見て「ボクにも兄妹がいたらよかったな」と羨ましそうに呟く時はあった。

大芽の部屋に沢山あるオモチャを一通り触った後、お手伝いさんが持ってきてくれたおやつを食べる。この家で食べるケーキも楽しみだった。それからかくれんぼをするため、広い家中に散らばるのが大体のパターンだった。

「お祖父さん、隠れさせて」

「やあやあ瑞穂ちゃん、よく来たね。さあ、こっちへおいで」

手招きしてくれるお祖父さんに笑いかけて、後ろ手に扉を閉める。数年前と違って息子に事業の大部分を任せたお祖父さんは、大芽のお父さんほど忙しくなかったようで、私たちが訪ねていった時は大抵家にいた。いや、本当は多忙だったのかもしれないけれど、それを私たちに悟らせようとはしなかった。今思えば、他に家族のいない大芽の為だったのかもしれない。

お祖父さんの部屋は、透明なボールの中に青い地球が入っている天球儀、飛行船のモービルや魚の骨のパズル、壁一杯の本棚なんかで埋め尽くされていて、私は入る度にわくわくしていた。サファイアブルーの海と白い浜辺を模した箱庭には、イルカと海パン姿の少年が交流する一場面が切り取られていて、それを眺めながら自分が一緒に泳ぎ回っているシーンを夢想したりしていた。

机に向かっているお祖父さんは、私に色んな話をしてくれた。

「瑞穂ちゃんは輪廻という言葉を知ってるかい？」

「りんね？ 何それ？」

「ははは。ちよつと難しかったかな。生まれ変わるって意味だよ」

「うまれかわる？ どういう意味？」

「人や動物は死んでも、また別の何かになって生まれてくるってことだね」

「生まれるって知ってる。大きかったお母さんのお腹がへっこんで、赤ちゃんのシンが家に来たことだよ」

「そうだよ。死ぬとはどういうことか分かるかい？」

「……タイちゃんのお母さんがいなくなった」

「お利口だね。よく分かっている。生まれることと死ぬこと、どう違うと思う？」

「んー。シンを初めて見た時は、柔らかくて小さくて可愛くて、胸

の中がフワフワした。タイちゃんのお母さんには会ったことがないけど、タイちゃんが寂しいのは嫌だな。こっちまで胸の中がモヤモヤする」

「大芽が寂しいと言ったの？」

「うっん。タイちゃんはそんなこと言わないし、私も言わない。言っちゃいけないの。でも、なんとなく……」

「そうか。大芽を気にしてくれるんだね、ありがとう」

「お姉ちゃんだもん！」

「頼もしいな。あの子はのんびりしているからね、心強いよ」
「任せて！」

「はい。大芽のことをよろしくお願いします。ところでなんの話だったかな？ ああ、輪廻だ。瑞穂ちゃんは神社とかお寺に行ったところある？」

「あるよ。ツナギさまだつて近くにあるし、お墓参りはお寺に行ってる」

「そうかい。お祖父ちゃんもよく神社にお参りに行くよ。家には神棚と言つて神様の場所もある」

「神様がおうちにいるの？」

「そう。住んでもらつてるんだ。神社にもお寺にも神様がいて、おじいちゃんやんは神社の神様をお奉りしている。でも、輪廻を説いているのはお寺の神様の方で、神社の神様は別の考え方を持っているんだ」

「お祖父さんは神社の神様が好きなのにりんねを信じてるの？」

「そうだよ。だって、お別れした誰かにまた会えるなんて、凄いとだと思わないかい？」

「じゃあ、タイちゃんはまたお母さんに会えるのかな？」

「もしかしたらね。今の生では会えなくても、次の生でまた親子になっているのかもしれない」

「へー。そうだったらいいな」

一言一句覚えていくわけではないけれど、確かこんな内容だったと思う。五歳の子供に輪廻なんて単語を使うなんて、お祖父さんは随分とアカデミックな人だったのだろう。当時は言っていることの半分も理解できていなかった。でもそれを見透かされるのが嫌で、私はそれらしく聞こえるような答えを一生懸命考えて返していた。それからしばらくして「またじいちゃんのところにいる！ ずるい！」とわめく鬼役のシンに私は発見された。

全てが楽しかった。見る物、体験する事柄、何もかもが虹色にコーティングされてキラキラしていた。

降り注ぐ蝉の声。太陽の光を弾き、宝石のように輝く水しぶき。そよぐ風に揺れる木漏れ日の涼しさ。かくれんぼで見つからないように息を潜めるドキドキ感と、探し当てられた時の嬉しいガッカリ感。明日もきつと浮き立つような出来事が待っているはずだと、何も憂える必要のなかった透明な時間。泥にまみれてもただただ無邪気でいればよかったこの頃が、私が大芽と過ごした中で一番幸せな時期だったのかもしれない。

小学三年生の頃、シンが風邪で寝込み、私だけが大芽の家に行っていたことがあった。その頃になると私は学校の友達と会う方が楽しく、彼とは月に一度遊べばいいくらいになっていた。でもシンと大芽はまだ仲が良くて、せっかく迎えにきてくれたのだから、と母に説得されて頷いたのだった。友達と約束があったのに。不承不承だった。大芽の部屋で二人、カーペットに座ってプレステをしていた時だった。視線は液晶画面に向けたまま、コントローラーを握った指を動かしながら小一の大芽は言った。

「ミズちゃん知ってる？ 僕たち大きくなったらケツコンするんだって」

「僕たちって？」

「だから、ミズちゃんと僕」

大芽と同じく画面に目を向けていた私は、そこで初めて彼を見た。すると、やった！　と大芽が片手でガッツポーズを作る。視線を元に戻すと、画面の右半分、私の方はゲームオーバーになっていた。でも彼の落とした発言に度肝を抜かれていた私には、勝ち負けなんてどうでもよかった。その時点で私はまだ父から何も聞いていなくて、婚約のことなんて知らなかったのだ。

「結婚って、大人の男の人と女の人がする？　なんで私が大芽と？」
昔と違い、私は大芽を呼び捨てにしていた。下級生をちゃん付けするなんて、年上のすることではないと偉ぶっていたのだ。私が再び大芽に目をやると、勝利の余韻に浸っていた彼もこちらを向く。幼い顔がニコニコと笑っていた。

「お祖父ちゃんとミズちゃんのお父さんで決めたんだって。僕はミズちゃんのことが好きだから嬉しいな。ミズちゃんは嫌？」
「嫌とかじゃなくて……」

私はカーペットにコントローラーを置き、キュツと眉根を寄せた。さすがに九才にもなると、結婚が表す大体の意味は掴めてくる。まあ具体的なことはともかくとして。少なくとも、幼稚園の先生と結婚する、という気軽さで口にできる単語ではなくなる。でも、大芽はまさに『幼稚園の先生と結婚する』というおおらかさで言っているように思えた。彼は子供である私よりもさらに子供で、私にとっては弟と同じような位置にいた。弟と結婚なんてできるはずがない。上級生のお姉さんとしては、はつきり断って傷つけていいものか迷う。

拳を口に当てて考え込んでいる私を見て、断られそうだと不安に思ったのか、大芽が両腕を広げ、振り回しながら口を開く。

「お祖父ちゃんとお父さんは、僕が泣き虫でワガママ言つとミズちゃんとかッコンできないよって脅かすんだ。道場にもちゃんと通つて強くなるよ。タマネギも好きになるよ、夜も早く寝るよ、オモチヤだつて全部あげる。だから僕とかッコンしようよ！」

焦つたように早口で大芽は言つた。私は幼稚園の時、リョウタ君にプロポーズされたサヤ先生の返事を思い出して、大きく頷いた。

「分かつた。いいよ。大芽がいい子になって、強くなって大人になったら結婚しよう」

成長の過程で忘れることを前提に交わしたいいい加減な約束。後年、それに縋りつきたくなるのが大芽ではなく私の方だなんて、想像もしていなかつた。

ともかくも、この出来事はすぐに私の記憶から追い払われた。それぞれの生活が忙しくなつた私たちは疎遠になり、大芽と再開したのは私が高校生になってからだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4575ba/>

巡る軌跡

2012年1月13日00時58分発行